

輝く女性・放射線セミナー —WIN フィンランド

エイヤ・カリタ・ブスカ

翻訳：西村純子 (WIN-Japan 理事, 三菱電機(株))

1. エネルギー・チャンネル

フィンランドで原子力業務に携わっている専門家女性の団体「エネルギー・チャンネル」は、フィンランド原子力学会のワーキンググループとして、1990年の春に7人の女性専門家によって設立された。1993年にWIN (Women in Nuclear: 原子力の専門家女性の世界団体) が設立されてからは、WINのフィンランド支部としても活動を続けている。現在では80名の会員を抱えており、エネルギー・チャンネルが毎年開催している「輝く女性・放射線セミナー」は、その活動の中で特に知られているものである。

エネルギー・チャンネルは政策決定にかかわる人々やその他の市民団体、特に女性に対して、セミナー、講演、情報誌、原子力施設見学、メディアでのインタビューなどを通じて、エネルギーや放射線に関する情報発信を行っている。

活動は、8人の主要メンバーグループによって企画・実施されているが、ここ数年は、「輝く女性・放射線」パンフレットの作成、一般女性とフィンランドの女性議員に対する「輝く女性・放射線セミナー」の実施、フィンランド原子力学会と共催のセミナー開催が主な活動である。この他にも、メンバー自身の研修と

して年2回のセミナーを開催している。

現在の会長は、VTT工業研究所の科学研究者カリン・ランタマキ博士(33歳)である。

2. 「輝く女性・放射線セミナー」の歴史

初回の輝く女性・放射線セミナーは、「エネルギーと環境」というテーマで、1997年に開催された。当初、セミナーは3年ごとに開催する予定であったが、初回セミナーが好評であったため、毎年開催することになった。1998年から、「放射線と環境」、「将来のリスク」、「女性—エネルギー—福祉」、「放射線と健康」、「エネルギーと社会」、「エネルギー業界の挑戦」のそれぞれのテーマで順次開催され、2004年のテーマは「放射線の有効利用」であった。

参加対象者は、フィンランドにおける女性の政策決定者(訳者註: フィンランドの国会議員の4割、閣僚の半数が女性である)とオピニオンリーダーであり、毎回官民双方、マスコミ、各種女性団体、教師、研究者など80から150名を募っている。

輝く女性・放射線セミナーは、多くの著名な女性を基調講演者として迎えてきた。フィンランド議会からは、リタ・ウオスカイネン議員、イルヤ・トゥロネン議員、また、前ヨーロッパ議会議員でもあるマルヨ・



写真1 基調講演を行うマルヨ・マティカイネン—カルストレム議員

マティカイネン—カルストレム議員らが議会を代表して講演した。2000年には、通商産業大臣のシニカ・メンケレ氏が、2001年には社会保健大臣のマイヤ・ベルホ氏が、2003年には運輸通信大臣のレーナ・ルフトネン氏がそれぞれスピーチを行っている。

さらにこのセミナーでは、フィンランドの先鋭の女性専門家によるハイレベルな講演が2つから5つ行われ、最後は、芸術関連の講演で締めくくられることも多い。「放射線による絵画の真贋判定」^{しんがん}、「フィンランドポップミュージック界の女性のエネルギー、エネルギーあふれる女性」などである。近年の講演テーマは、フィンランドのエネルギー政策に深く関連するものとなっており、エネルギー政策に関する市民の関心が高まっていることから、各政党代表によるパネルディスカッションも行われている。



写真2 熱心に聞き入る参加者

3. 放射線の有効利用—輝く女性・放射線セミナー 2004

2004年の輝く女性・放射線セミナーのテーマは、「放射線の有効利用」とし、医療分野での放射線利用、放射線診断について議論した。

エネルギー・チャンネル会員でもあるマルヨ・マティカイネン-カルストレム議員は、基調講演で放射線の2つのイメージについて述べた(写真1)。ひとつは、エネルギー源としての放射性物質に対するネガティブで怖いというイメージであり、もうひとつは、医療用の放射線がわれわれを助け、時に命を救うというイメージである。どちらも同じ物理現象であるのに、受け止め方はまったく逆である。放射能は自然界の一部分なのだ彼女が続けた。

放射線の医療分野での利用は、工学技術と医療技術の共同開発の好例であり、真の技術革新であると強調し、また、放射性廃棄物は、原子力発電に比べれば非常に少ないものの、医療分野でも発生しており、原子力発電による放射性廃棄物と同様に、

慎重かつ責任を持って管理されなければならないと述べた。放射線治療用機器の機能向上や、十分な品質管理、使用者の教育訓練、定期的な校正・検査が治療の効用に貢献し、治療者の被ばく量低減に結びつくとともに一般人の安心感を増すと結論づけた。

講演を行ったのもすべて女性で、医療分野の専門家と、放射線・原子力安全局(STUK)のメンバーである。最初の講演者である、STUK検査官ラウラ・フルト氏は、さまざまな放射線の種類について解説した。ヘルシンキ・ウーシマ地区病院連合(HUS)レントゲン部会のリーナ・ラウリスト博士は、女性参加者の関心の高いマンモグラフィ(乳房X線撮影)について講演し、メヒレイネン医療サービスのシルッカ・リウコネン博士は、同じく女性の関心が高い超音波産婦人科診断について講演した。HUSレントゲン部会のオウティ・シブレ博士は、治療被ばく量の算出、放射線治療、またさまざまなコンピュータ映像処理技術について講演した。最後の講演者である、STUKのリトヴァ・パーキネン博士

は、医療分野での放射線利用に関する調査結果を発表した。

これらは、「普通の女性」に非常に身近な講演テーマだったことで、参加者はとても熱心に聴講(写真2)していた。誰もが自分の健康状態に関しては非常に関心が高いことから、活発な質疑応答となった。生き生きとした議論は、その後のカクテル・パーティーの場まで続き、今年のセミナーは、エネルギー・チャンネルのロゴ入りラベルの特製ワインで華やかに幕を閉じた。

セミナーの講演資料(残念ながらすべてフィンランド語だが)、写真は、エネルギー・チャンネルのホームページ <http://www.ats-fns.fi/> でご参照いただきたい。セミナーの内容を掲載した「輝く女性・放射線」パンフレットの第5号は、現在準備中である。



[エイヤ・カリタ・ブスカ
フィンランドVTTプロセス
社原子力発電工学グループ
マネージャー]